

一 西ドイツの農業と 酪農のあらまし

— 農業生産は決して高くない —

西ドイツの国土は日本よりも狭く約七〇%弱ではあります、農地、草地の利用率は我国よりも遙かに高く（国土の五八%で日本の約三倍の率）、結果として農地、草地としての利用面積は日本の約二倍もあります。一方人口は日本の約五五%ですから、日本の農業生産水準からみますと当然食糧

自給が可能と考えられます、その食糧自給度は七五%で農業生産の決して高い国ではなく、如何に工業に入れていた國柄であつたかが窺知されます。

然しどんな工業が発達しようと食糧の自給は洋の東西を問わず重要事であるだけに西ドイツでも「西ドイツの基本課題は外交でも其の他の問題でもなく農業政策の位置づけにある」と生産向上のための農業構造改善に真剣に取り組んでおります。

それはかつての農業生産向上のためにとった価格保証制度の歪を是正しようとするもので、

農地整備と農場移転を主体としており、分散圃場の集団化、自立経営……経営規模の拡大の方向への体質改善に努力しており、着々その成果も挙がりつつあるようですが、進展ぶりの一端を挙げますと、農地の拡大では最近一〇ヵ年間で一〇分以下の小農は二〇%減少に対し、一〇~一五分の大農層が一〇%増加、農家の平均耕地面積も従来の七分が約二〇%増の八・三分となっています。

(1) 酪農はどうか

— 乳肉兼用種で一頭平均三・四分搾乳 —

乳牛は総数五九〇万頭で品種と密度分布をみると最も密度の高いのは北部地区で、品種はホルスタイン（総牛数の五四%）次いで南部で、この地帯はスイスに類似しシングメンタール（二二%）ブラウンスイス（六%）、中央部は最も密度低く品種としてはロットバウン（一二%）其の他一~二品種が存在しますが、乳量は平均三、四〇〇キロ（一九五、最も高いホルスタインで三、

九〇〇キロ（脂肪率三・九%）で決して高くはありません。然しホルスタインそのものもオランダ系に較べて一層肉に重点を置いており、西ドイツの乳牛全品種が乳肉兼用種であることを忘れてはなりません。

乳価の詳細は酪農家でも理解しているものは少ないようですが一・八兆五七円程度でこの中の二〇%は不足払い制度によるものようでした。

(2) 飼料基盤は

— 牧草と根菜では

体重五〇〇キロの家畜飼育に一分

一方これを支える飼料基盤の状況をみると、農業全用地一、四〇〇万分中禾穀類

と牧草、飼料作物が各半ばしており、牧草

飼料作物は、

①輪栽草地

禾穀類の大麦には殆んど例外なく同伴作物として赤クロバーレーサンを主とした牧草があり、これが麦刈取後草地として利用されるもので短年草地

②刈取草地

一〇~一五年で更新するもの

で主として採草利用で三〇〇万分前後。

③放牧地

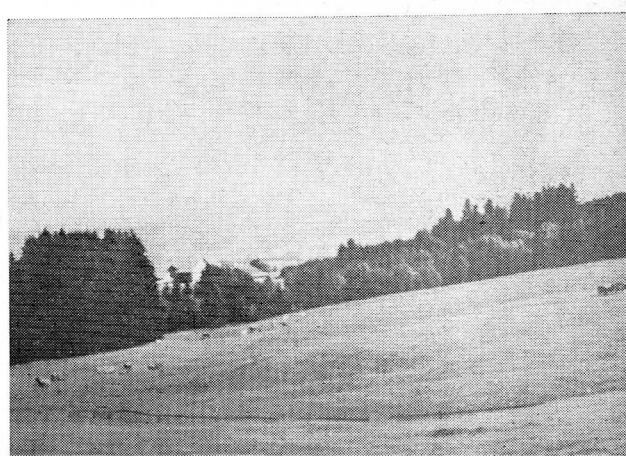
刈取草地同様一〇~一五年位で更新し放牧専用地が二〇〇万分前後。

④飼料根菜

主として家畜ビートで一〇〇万分前後。

二 特に学びたい放牧技術

西ドイツバイエルン地方は丘陵の多い農村



大方見当づけますが、

○輪栽草地……年三回刈が普通で、乾草又はサイレージ、時に放牧

○刈取草地……主として乾草生産

従つて牧草（乾草、サイレージ、放牧）と飼料根菜で年間の飼料給与が行なわれているわけです。

西ドイツの農業、酪農のあらましをみますと生産がそれ程高くないという結果になりますが、優れた経営技術も多く、特に草地への放牧については我が国酪農にとっても大いに学び取りたいものがあります。

(1) 輪換放牧発祥の地、ホーフハイム

西ドイツの農業開発で最も力を入れていると言われているバイエルン地方（中心はミュンヘン）は丘陵の多い地帯ですが、この